国際関連情報 Report from IFRS-AC

IFRS 諮問会議の活動状況

IFRS 諮問会議　委員／
日本証券アナリスト協会　参与　金子（かねこ） 誠一（せいいち）

はじめに

国際財務報告基準財団（IFRSF）の IFRS 諮問会議（IFRS-AC）*は、2011 年 10 月 10 日、11 日の両日、ロンドンにおいて開催された。日本からは米家正三伊藤忠商事常勤監査役、金融庁からは園田周企業開示課課長補佐および筆者が出席した。以下、会議の概要を報告する。

＊　国際会計基準審議会（IASB）に対し、検討事項やその優先順位をアドバイスするための組織である。従来は基準諮問会議（SAC）と呼ばれていたが、2010 年 4 月に名称変更した。委員は 45 名強。日本からは、経団連代表の米家正三伊藤忠商事常勤監査役および日本証券アナリスト協会代表の筆者が委員である。他に金融庁から 1 名がオブザーバー（発言権あり）で参加している。IFRS-AC は年に 3 回、ロンドンで開催される。

1．議事一覧

番　号	日　時	議　事
(1)	10 日　9:00- 9:45	IASB の活動報告
(2)	同　9:45-10:45	IFRS-IC レビュー
(3)	同　11:00-12:00	DPOC
(4)	同　13:00-13:50	戦略レビュー
(5)	同　13:50-16:00	IFRS-AC のプロファイル高揚
(6)	同　16:00-16:45	Agenda Consultation
(7)	同　16:45-17:25	概念フレームワークへの取り組み
(8)	11 日　8:00-10:15	収益認識（教育セッション・分科会）
(9)	同　10:15-12:00	保険
(10)	同　12:00-12:45	収益認識（全体会議）

(11)	同	13:30-14:15	XBRL
(12)	同	14:15-15:00	世銀のレビュー
(13)	同	15:00-15:30	IFRS のブランド
(14)	同	15:30-16:30	IFRSF の教育活動

＊　会議資料は下記から入手できる。
http://www.ifrs.org/Meetings/IFRS+Advisory+Council+October+2011.htm
＊　会議の録音は下記から入手できる。
http://www.ifrs.org/The+organisation/Advisory+bodies/The+SAC/SAC+meetings/Meeting+audio+playback/audio.htm

2. 議事概要

(1) IASB の活動報告

Hoogervorst IASB 議長より最近の基準開発動向について説明があった。金融商品の減損については、いろいろな案を作っても銀行から「コストがかかりすぎて実務的に無理だ」といわれてフラストレーションを感じている、と述べていた。

(2) IFRS-IC レビュー

トラスティが行っている IFRS 解釈指針委員会（IFRS-IC）のレビューについて説明の後、議論を行った。IFRS-IC が各国に固有の事情まで検討の対象とするかどうかについて意見が分かれた。英国の財務諸表利用者から「IFRS-IC は既存の基準の解釈を行うのだから、委員は現在 IFRS を採用している国の代表者に限るべき」という意見が出たので筆者は次の発言をした。「資料の A16 項にもそうした見方が紹介されているが、ちょっと近視眼的すぎるのではないか。現在採用していなくても IFRS を改善することに意欲を燃やしている国はある。そうした国の代表者を受け入れるのは将来 IFRS が全世界で採用されるために必要なステップである。」

IFRS-IC のレビューについては、6 月の会議で再度議論する予定となった。

(3) DPOC（Due Process Oversight Committee）

トラスティの DPOC 委員長 Sidwell 氏から同委員会が作成した、Due Process 監視のための手続書（Protocol）について説明があった。一般的に Protocol を評価・支持する意見が多かったが、Protocol が複雑すぎるとの懸念も表明された。筆者は次の発言をした。「Protocol は大変良くできていると思う。ただし、日本証券アナリスト協会の企業会計研究会は IASB の Due Process には問題があると考えている。問題とは討議資料、公開草案、最終的な基準の間のギャップが大きすぎるということである。公開草案と基準がかけ離れるので、公開草案を 2 度出すケースも生じている。こうした事態が続くと投資家は討議資料や公開草案に関心を持たなくなる。問題の原因は IASB が基準開発の各段階で関係者の意見聴取を十分に行わないことである。Protocol でも意見聴取が必須（required）になっているのは、プロジェクト計画段階だけだ。これを改訂し、討議資料・公開草案（技術的な改変を除く）段階でも意見聴取を必須とするよう提案する。」

(4) 戦略レビュー

IFRSF の Seidenstein 氏および金融庁の園田

氏から、トラスティおよびモニタリング・ボードそれぞれの戦略レビューの現況について説明があった。複数の委員から、両レビューを統合してほしいという要望があった。2012年2月のIFRS-ACで両レビューを公開前に検討することになった。

今回の会議に米国証券取引委員会（SEC）からは主任会計士のJim Kroeker氏が出席しており、SECの現況について次の説明があった。「戦略レビューが検討されているIFRSFおよびモニタリング・ボードのガバナンス問題がはっきりすれば、SECのIFRS採用判断が容易になる。5月のSECスタッフペーパーで提案したCondorsement Approachとは米国財務会計基準審議会（FASB）がIFRSとの間に新たな差異を作らないことだと理解している。SECが2011年内に①米国基準とIFRSとの相違点、②IFRSで実際に財務報告を行っている会社間の差異、③IFRS採用に向けたワークプランの現況、の3レポートを出す予定は変更ない。」

⑸　IFRS-ACのプロファイル高揚

IFRS-ACでは過去の会議において、パフォーマンスの自己評価を行ってきたが、これを踏まえてどうしたら今後より効果的に機能できるかを、分科会での議論を含めて検討した。Webの活用、議事内容の公開等によりIFRS-ACの活動の透明性を高め、各委員が代表する組織とのコミュニケーションも活発にしたいというのがコンセンサスであった。モニタリング・ボードとの関係については間接的なものとし、トラスティおよびIASBへのアドバイスに注力すべきという点でも意見は一致した。

⑹　Agenda Consultation

IASBが行おうとしてる今後のAgenda検討について、Hoogervorst IASB議長の説明の後、議論した。収益認識やリース等、現在開発中のプロジェクトを早く片付けてほしいという意見が多かった。また、今後におけるコンバージェンスの役割、各国の基準設定主体との関係について明確にしてほしいという意見もあった。中国の委員がIFRS第9号がOCIで評価する株式を売却した場合にリサイクリングを禁止しているのはおかしいという意見を述べていた。

⑺　概念フレームワークへの取り組み

フランスの委員（基準設定者）が準備したメモ（概念フレームワークの簡略版を作るべきだという極端な意見）をベースに議論が行われた。概念フレームワークの整備を求める意見が多かった。Hoogervorst IASB議長より、純利益やOCIは概念フレームワークの問題であり、これを本格的に議論すると時間がかかるので、早く結論を出せる仕組みを考えたいとの発言があった。

⑻・⑽　収益認識

IASBが近く再公開草案を出す予定の収益認識プロジェクトについて、教育セッション、分科会を交えて検討があった。再公開草案については、概ね支持する意見が多かったが、①個別産業の意見を聞くこと、②より詳細なガイダンスを出すこと、③フィールドテストを行うことの必要性を指摘する意見が多かった。

⑼　保　険

IASBとFASBのジョイントプロジェクトであるが、IASBは既に公開草案を出しているのに、FASBは討議資料にとどまり、また両ボードの見解も大きく割れている案件である。IASBは1つのモデルを提案しているのに対し、FASBは短期契約と長期契約の2つのモデルを使う提案をしている。保険業界は一般にビジネスモデルの相違を勘案するよう要求しており、

FASB提案の方に親和性を感じている模様である。アナリストの意見も一般に北米のアナリストはFASB支持、欧州はIASB支持といわれている。IASBがFASB提案と一本化するためには、再公開草案を出す必要があるが、この場合、基準化まで3年はかかるといわれており、ここ一両年にIFRSを採用した諸国のことを勘案するとそこまで延ばせるかが悩みの種となっている。

当セッションにはFASBのSiegel理事も参加した。監査法人デロイトの保険担当者から上記のような説明の後、議論に移った。保険業界を代表する委員から、①ビジネスモデルの相違を認める、②保険負債は資産の期待収益率で割り引く、③資産負債の変動はOCIで認識することを要求する強い意見が出た。欧州財務報告諮問グループ（EFRAG：EUにIFRS採否をアドバイスする機関）の委員が、「IASBは全てを再公開するのではなく、FASBとの相違部分だけを取り上げることによって時間を短縮できるのではないか」という意見を述べて注目された。

筆者は次の発言をした。「2000年代初めまで30年近く日本の生保会社に勤務したが、この時、業界は文字どおり崩壊し、終戦直後に設立された20社のうち、今日までそのまま生き延びているのは5社ほどである。この理由は多々あるが、古風な会計基準によって負債金利が6%なのに国債利回りが2%にすぎないという巨大な逆ザヤがもたらす影響の認識が遅れたのも大きな理由のひとつであった。もし、当時に現在提案されている基準を用いていたら、より多くの会社が生き延びただろう。この意味で、両ボードは自信を持ってプロジェクトを進めてほしい。ただし、業界OBとしては、負債の割引率に期待収益率を用いること、および資産負債の変動をOCIで認識することは、保険会社のビジネスによりフィットするものと考える。現在の提案自体が革命的なのだから、両ボードは測定および表示については柔軟に対応しても良いのではないか。」

⑾ XBRL

IASBの担当者からXBRL開発状況の説明があった。投資家のXBRLに対する期待は分かれており、CFA協会（米国のアナリスト協会）は近くサーベイをする予定とのことである。

⑿ 世銀のレビュー・⒀ IFRSのブランド

世銀とIMFがIFRSの適用状況を調査したところ、多くの不一致が見つかった。「IFRSのブランド」とは、IFRS適用の一貫性を含めIFRSを健全に育てていくというテーマで6月の会議で議論を行ったものである。IFRS-ACとしてはトラスティとともに今後とも適用の一貫性を注視していくこととした。

⒁ IFRSFの教育活動

担当者からIFRS教育プログラムの進展状況について説明があった。「IASB理事会の概要を伝えるポッドキャストは情報価値が高いが、英語を母国語にしない人には全部理解するのは難しいので、事後でいいからスクリプトを公開してはどうか」と発言したら、「出演者にゆっくり話すよう良く言っておく」といなされてしまった。